〝対話〟を根幹とした「自学自習」を礎に
世界から集う多様な若者が切磋琢磨し
独創性あふれる研究で地球社会に貢献

1897（明治30）年、日本で二校目の帝国大学として創立された京都大学。アジア諸国で最多のノーベル賞受賞者を輩出するなど、「地球社会の調和ある共存に貢献すること」を基本理念に今日まで歩んできた姿勢は、わが国を代表する研究型大学としての125年を超える軌跡に表れています。

それら独創的な研究の業績は、「自由の学風」のもと生み出されたものにほかなりません。教育では伝統的に「対話を根幹とした自学自習」を柱に据え、学生の知的好奇心や探求心を育んでいます。

「京都大学では周りの多様な人たちとの交流を深めながら、味わったことのない喜びをたくさん経験してほしい」と語る湊総長。多様で有為の人材が世界中から集うことのできる魅力ある教育[1]・研究[2]環境の整備と、自律的な運営基盤を強化するための産学連携活動や基金活動[3]、社会への発信などに注力し、地球社会に貢献する京都大学の力強い歩みを着実に未来につないでいます。

みなとながひろ
湊 長博総長

1975年京都大学医学部卒業。同大学結核胸部疾患研究所附属病院医員、米国アルバートアインシュタイン医科大学微生物免疫学教室客員研究員、自治医科大学助教授、京都大学医学部教授、同大学大学院医学研究科長・医学部長、同大学理事・副学長などを経て2020年より現職。

京都大学

〒606-8501　京都府京都市左京区吉田本町　学務部入試企画課　TEL 075-753-2521　https://www.kyoto-u.ac.jp/

「自由の学風」が生み出す独創的研究で地球社会に貢献 ノーベル賞受賞者はアジア最多

京都大学は1897（明治30）年に日本で二校目の帝国大学として設立されました。その背景には、政治の中心から離れた京都の地に自由で新鮮な、そして本当に真理を探求し学問を研究する学府としての大学を作るという構想があったと言われています。京都帝国大学の創設に携わった初代総長の木下廣次は、創立後最初の入学宣誓式で「自重自敬」について述べ、学生の自主性を尊重しました。この言葉を礎に125年を超える伝統の中で築かれてきたのが、京都大学を象徴する「自由の学風」なのです。

その自由の学風のもと、創造的研究を尊び、地球社会の調和ある共存に貢献することを基本理念としてきた歩みは、京都大学ゆかりのノーベル賞受賞者の軌跡に表れています。

革新的な素粒子論を唱え、日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士（1949年、物理学賞）をはじめとする11人の受賞者数は、アジアの大学の中で最多を誇ります。また「数学界のノーベル賞」とも呼ばれるフィールズ賞の日本人受賞者3人のうち、廣中平祐博士ら2人が京都大学を母校としています。

2018年には、体の中で免疫の働きにブレーキをかけている物質を発見し、がんの免疫療法や治療薬の開発などに貢献した功績により、本庶佑・京都大学高等研究院特別教授がノーベル生理学・医学賞を受賞しました。その本庶博士と研究をともにしてきたのが、湊長博総長その人でもあります。「自由の学風」が世界のトップと渡り合う高い研究力を一貫して培ってきた背景について、湊総長はこう話します。

「自由の学風とは、言い換えれば独創的であるということです。京都大学の科学の伝統は、自然科学であれ人文社会科学であれ、時代のトレンドを追うのではなく、未知の領域に果敢に挑戦することだと思います。これは0から1を生むことであり、湯川秀樹先生はしばしば〝飛躍する〟と表現されています。多くの国際賞の中でも、ノーベル賞の特徴は独創性や新規性を最も重視する点にあり、京都大学からの受賞者が多いのはそのためかもしれません」

京都大学への入門授業「ILASセミナー」で自ら学問することを学ぶ

こうした独創性の根源である知的好奇心と探求心を大切にしてきた京都大学では、「研究を通して教育する」を伝統的なモットーに掲げ、それを体現する「対話を根幹とした自学自習」を教育の柱に据えてきました。その知的空間にあふれる学問の魅力に触れる第一歩となるのが、各学部の枠を超えて、教養科目や外国語、専門基礎科目といった学士課程に共通する科目の企画および実施と教育の国際化[4]を担う「国際高等教育院（ILAS）」による教養・共通教育です。どの学部に入学した場合も、学部ごとに実施する専門教育を履修する前、もしくは専門教育と並行しながら「全学共通科目」を学びます。8つの科目群で開講数は約3000クラスにも及びます。

湊総長は次のように説明します。

「重点の一つは、個々の学問領域を超えた幅広い分野の知見を広げるカリキュラム編成です。もう一つは、5～25人程度のインタラクティブな少人数教育です。自然科学から人文学、社会科学、グローバルな課題まで、生きた現場で教育研究に携わる教員と学生たちが半年あるいは通年、同じメンバーで特定のテーマについて議論しながら授業を進めます。その過程で生じる課題を解決に導く策を教員がアドバイスします。このようなゼミナール方式の科目として、主に学部新入生を対象とする『ILASセミナー』を毎年250以上開講しています。高校までの知識習得を中心とした学習とは異なり、大学では自ら課題を見いだし、必要な資料を収集し、対話を通じて新たな知識を生み出すという学問のプロセスがあることを知ってほしい。全員が研究者になるわけではありませんが、それは社会の多方面で活躍するために必要な視点や素養を身につけるためのプロセスでもあります。その中で〝対話〟がどれだけ大事かということを分かっていただきたい」

京都大学では学問する楽しさを高校生に届ける活動も実に盛んです。

高大連携の一環として実施する「学びコーディネーター事業」では、京都大学のあらゆる研究科に所属する大学院生らが自身の研究内容を高校生に紹介する「出前授業」を行っています。引っ張りだこの人気で、昨年度は全国49校において実施し、延べ約4200名の高校生が受講しました。

また、高校生のための体験型科学講座「ELCAS（エルキャス）」は、京都大学の研究者による多彩な授業を、対面またはオンラインから選択して受講できる【講義型】や、研究室等を訪問して先端研究の演習授業を体験する【演習型】を通じて、学習意欲の高い高校生が高度な学術にふれる機会となっています。2025年度は、文系・理系合わせて、講義型9講座、演習型11講座を開講しました。

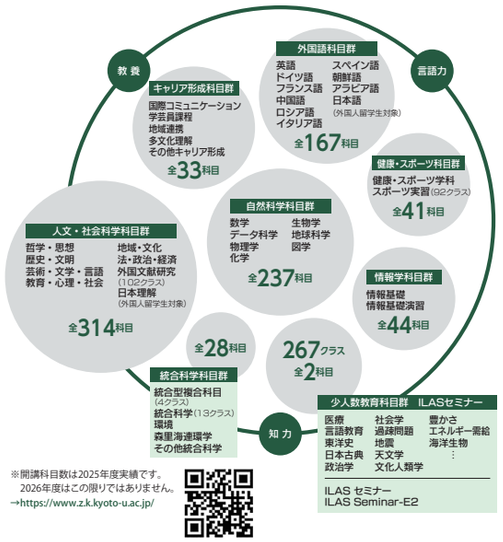
ILASセミナーの様子（左、右とも）

人材も教育研究も、自由な精神的風土のなかで多様性を推進

多様で有為の人材が世界中から集うことをビジョンの一つとして掲げる湊総長。研究の多様性やダイバーシティについてこう話します。

「新しい発見は、それがオリジナルであるとともに多様であることが必要です。時代のトレンドだけを追いかけるキャッチアップ型では、なかなか新しい発見や考え方は出てこない。まだ誰も研究していなくても大事だと思う領域から始め、それを独創的な手法で繰り広げることで、やがて世界からも注目を集めることになります。本学は伝統的にこのようなタイプの研究を継承してきました。がん免疫にしてもiPS細胞にしても、リチウム電池や素粒子にしても全部そうです。このように研究を進めるためには多様性が不可欠で、さらにその原点にあるのが、本学の自由の学風です。自由の学風とは、単に何をしても良いという意味では

全学共通科目



※開講科目数は2025年度実績です。
2026年度はこの限りではありません。
→https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/

(1) 京都大学の教育

○大学院教育支援機構

優秀で意欲のある学生の修士課程、博士後期課程への進学を促進するため、2021年に設置。大学院生に対する経済支援を拡充するとともに、博士人材が幅広く活躍するためのキャリアパスの多様化を図る。その上で、留学生のリクルーティングや国際教育（海外短期留学、海外インターンシップなど）の支援を通じて、多様な人材を獲得・育成するとともに、その才能を世界に還元する「頭脳循環」の加速を目指している。23年4月には、アントレプレナーや教育力向上などを目指すコースがスタートした。

(2) 京都大学の研究

○次世代医療・iPS細胞治療研究センター（Ki-CONNECT）

iPS細胞をはじめとする新しい医療技術や附属病院が誇る統合医療データを医療・創薬の早期実用化につなげるため、2020年4月に京都大学医学部附属病院に設置。難病や希少疾患における早期臨床試験のための専用病棟として、臨床試験を推進するとともに、臨床情報にリンクしたクリニカルバイオバンクの拡大と応用に取組んでいる。

○がん免疫総合研究センター（CCII）

2020年4月、京都大学大学院医学研究科附属教育研究施設として設置。初代センター長にはノーベル生理学・医学賞受賞者の本庶佑高等研究院特別教授が就任。日本初の「がん免疫」研究の拠点として、次世代のがん免疫研究者の育成と国際的研究ネットワーク形成を目指し、基礎から臨床応用まで一貫した研究体制により、わが国の革新的医療開発の先導的役割を担っていくことが期待されている。

(3) 京都大学の産学連携活動

○京都大学成長戦略本部

2024年4月、研究力強化のために財政基盤を確立させ、自律的な大学組織への構造改革を進める「成長戦略本部」を設置。同本部は、これまでの産官学連携本部、オープンイノベーション機構、渉外部基金室、医学領域産学連携推進機構などを統合した。研究成果の事業化やスタートアップ支援などを通じて新たな価値を創出するとともに、本学と社会とのコミュニケーションを深め、寄付などの資金の獲得活動を強化する。また、これらの資金を大学に還元し、さらに自由で自律した研究活動の展開へとつなげ、大学の持続的成長を実現していく。

日本の学生とグループワークを行うKyoto iUP生

なく、精神的な自由のことなのです。つまり精神的な自由がなければ、多様性や独創性は生まれない、ということです。これを基本的な姿勢とし、本学では性別や国籍などにかかわらず、多様な人材が活躍できる環境を構築しています」

具体策の一つとして、女子学生や女性研究者の比率向上のためにロールモデル（お手本になる人物）を増やす取り組みが挙げられます。学部生の5人に1人が女子学生という京都大学では毎年、女子高校生に向けたイベントを開催。このうち、「女子高生・車座フォーラム」では、京都大学ではどんな勉強や研究をするのか、大学卒業後の進路はどんなものがあるのかなど、さまざまな疑問について女子学生や女性研究者と気軽に話ができる場を提供しています。また、「女子高生応援大使」では、女子学生が「応援大使」として母校を訪問。座談会のような形で後輩に京都大学の魅力や大学生活の様子を伝え、受験勉強の仕方や高校時代の過ごし方などをアドバイスします。

女子学生に対しては、研究活動の中で今よりもましてリーダシップやイニシアティブを発揮できるよう、2023年度から「女子学生チャレンジプロジェクト」がスタート。新しい課題にチャレンジする活動に奨学金を支給します。若手の女性研究者には、優れた成果を讃える「京都大学たちばな賞」を設けています。

2026年度より、理学部と工学部の特色入試[5]（総合型選抜および学校推薦型選抜）において、女性募集枠を新設。女性募集枠は、男女比率の偏りが大きい学部において、多様な視点を取り入れるために新設され、既存の特色入試や一般選抜と異なる評価軸で選抜が行われます。女性募集枠を含む特色入試での合格者は、学部・学科が、学生自身からみなぎる学びへの意欲を評価し、将来の活躍への期待を強く込めた学生です。京都大学は、そういった意欲あふれる学生が、困難なく自由に学びを深めることができる環境を整備しています。今後も、女性募集枠の新設にとどまらず、多様な学生を広く受け入れるため、学生の学びへの思いに、京都大学も全力でぶつかっていきます。

留学生の将来の選択肢を広げ、日本の学生もともに切磋琢磨する「Kyoto iUP」

一方、海外の最優秀層の学生の獲得にも積極的に乗り出しています。世界各国のトップ高校から学部への留学生数を伸ばすため展開しているのが、「Kyoto iUP」です。

このプログラムは特長として、入学段階での日本語能力は問いません。学部入学の半年前から徹底した日本語教育を継続的に実施しながら、英語による教養・共通教育、英語または日本語による専門基礎教育を経て、専門教育段階からは日本語で講義などを受講します。従って、遅くとも3回生では高い日本語能力が求められることになります。また、留学生と日本の学生がともに学ぶ少人数ゼミや、日本企業へのインターンシップを実施。日本語で学部卒業レベル（あるいは博士後期課程修了レベル）の専門知識を獲得します。

「英語はアジア圏を含めて共通言語になっていますから、英語が使える海外の優秀な高校生を積極的に受け入れています。ただ、日本語がある程度使えないと、社会に出たときに日本では壁にぶつかってしまうのですね。学部4年間のうちに日本語でもコミュニケーションが取れるようになれば、卒業の段階で進路の選択肢が広がります。本国に帰国して活躍するのもいいですが、日本で大学院課程等に進学してもいいし、企業に就職してもいい。優秀な留学生がグローバル展開を図る日本企業へ就職することは、我が国の発展にもつながります。さらにKyoto iUPは、日本の学生にとっても英語を本気で勉強する良い機会になっています。入学当初の留学生は大半が英語しか使えませんので、日本の学生が英語による教養・共通教育をともに受け、英語でないとコミュニケーションできない環境に身を置くことは、良い意味でのプレッシャーとなり、生きた英語を勉強することになるのです。また、アジアの優秀な高校生が海外大学の進学先を検討する際、本学のKyoto iUPが欧米の有力大学と並ぶ選択肢に入ってきていることは、日本の学生にも非常に刺激になっている。互いに切磋琢磨する場として大いに意義のあるプログラムです」と湊総長は説明します。

気概あふれる優れた研究者らが多様でユニークな活動を展開する世界の“Hakubi”（白眉プロジェクト）

西田哲学や霊長類学など新しい学問を生み出してきた伝統を持つ京都大学では、新たな潮流を拓く次世代研究者の育成にも注力。特に若手研究者を支援するとともに、女性研究者を増やすことを重点目標に位置づけたさまざまな仕組みを構築しています。

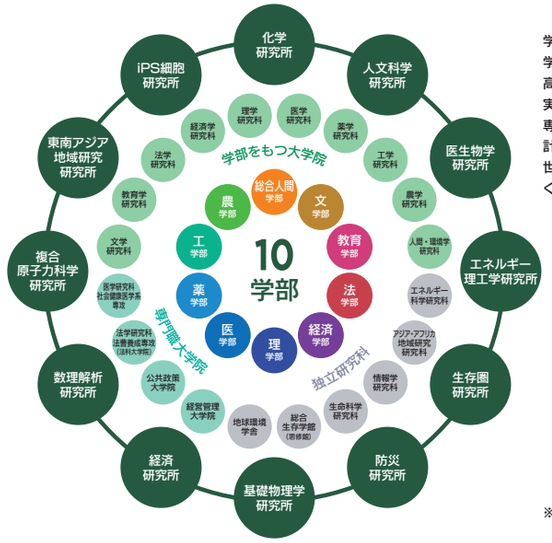
中でも、ひときわ優秀な若手研究者に5年間研究に没頭できる環境を提供するのが、「白眉プロジェクト」です。国籍を問わず、博士の学位を有する者（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）を対象に、毎年あらゆる分野から国際公募により選抜し、京都大学の特定教員として採用します。2024年度は256名の応募があり、9名の女性研究者を含む20名をグローバル型白眉研究者として迎え入れました。湊総長はこう話します。

「この事業は国のプログラムや政府の補助金に依存しない本学独自の取り組みとして2009年に発足したものです。自らのアイデアで研究に打ち込みたい若手研究者を世界中から募り、学内外のさまざまな分野の有識者による包括的な審査が行われます。その際、それまでの論文などの業績は度外視し、純粋にその人が今やりたいと希望することに対して、いろいろなフィールドから見て意味があるか、価値があるか、面白いかという観点で評価するのです。採用者には5年間、研究活動に専念できる恵まれた環境が提供されます。これまで非常にユニークな研究者を多く輩出し、海外でも“Hakubi”だけで通用するほど高く評価されるようになりました。さらに、Q値（国や組織の全論文数に占める上位10％の補正論文数の割合）を見ると、白眉の研究者グループはハーバード大学やMIT（マサチューセッツ工科大学）に匹敵する成果を挙げてきています。論文の実績だけでなく、主体的に何をしたいか、具体的な研究計画に主眼を置くことが、結果的に人材育成にとって非常にインパクトがあるということを実証していると思います」

白眉プロジェクト「京都大学創立125周年記念 研究の魅力を見出す“鏡”プロジェクト」の様子

有機的につながる京都大学の学びの場

学部とつながる10の大学院のほか、
学部をもたない独立研究科、
高度で専門的な職業能力をもつ
実務家を養成する
専門職大学院など、
計18の大学院を備えています。
世界に誇る独創的な学術研究が日々、
くりひろげられています。



※『京都大学　大学案内2026 知と自由への誘い』より作成

(4) 教育の国際化

○国際高等教育院国際教育プログラム

英語による全学共通科目や、Kyoto iUPの留学生とともにグループワークやプロジェクトに取り組む科目の履修に加え、海外留学の経験を積むことで、新たな価値観を創造する真の国際性を涵養する学部教育プログラム。

同プログラムの学生は留学の費用補助を受けることができる。海外の大学・研究機関との「大学間学生交流協定」などにより、履修者はイギリス、スイス、オーストラリア等幅広い地域に留学している。

(5) 京都大学特色入試

大学入学共通テストで測られる一定の基礎学力を前提として、高校時代の顕著な活動内容（例えば数学オリンピック出場や国際パカロレアディプロマコースの成績など）が分かる調査書や学業活動報告書、志願者本人が作成する「学びの設計書」などをもとに選考する。学部によって、能力測定考査、論文試験、面接試験、口頭試問などが行われる。2025年度入試の志願者は596人。合格者数は145人で、うち女子は84人と57.9%に達した。

※2027年度の変更点の詳細および大学入学共通テスト経過措置科目の取り扱いは、京都大学のホームページでご確認ください。https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/tokusyoku

● ザッツ・京大

京都大学が標榜する「自由の学風」から生み出される「京都大学らしさ」を集めたサイト。好きなことをやれと言われても何をすればいいのか分からない、そんな時にのぞいてみるのがお勧め。大学という箱を使って、一人一人がどう自分らしさを追求しているのか、「自由」の正体がじわっと感じられてくる。広報室にある「ザッツ編集部」が制作を担当する。
https://www.thats.pr.kyoto-u.ac.jp/

経済的に困窮する学生の高い志を社会全体で後押しする給付型奨学金「CFプロジェクト」

京都大学では、経済的に困窮しながらも高い向学心と研究意欲を持ち、グローバルな活躍を志す学生（学部、修士課程、博士後期課程）を支援する返済不要の奨学金制度「Create the Future Project（CFプロジェクト）」を2021年5月に立ち上げ、翌22年度から給付を開始しました。このプロジェクトは、建築家の安藤忠雄氏や株式会社ニトリホールディングスをはじめとする個人や企業からの寄付金を基金としたもので、向こう10年間で約1200名の多様な分野への挑戦を後押しし、次代を担う優れた研究者らを育成することを計画しています。湊総長はこう話します。

「コロナ禍で学生の生活苦が顕在化しました。少なくとも、在学中に経済的理由によって進路を断念することだけはないように支援したいというのが、この奨学金の原点です。勉学や研究への強い意欲を持っている学生たちには、チャンスを逃すことのないように社会の善意でサポートする仕組みが大事になってきます。“Create the Future”というのは、社会全体で若い人たちの将来を作り上げていこうじゃないかという意志の表れですね。幸いにも、各界の多くの方々にご賛同いただき温かいご支援をいただいております」

そして、京都大学を志望する受験生に湊総長はこう語りかけています。

「大学生活というのはやはり特別だと思うのです。高校時代とはまったく違う生活スタイルになるわけですね。社会の縮図である大学でさまざまな情報に触れたり、素養を身につけたりするプロセスを思い切り楽しんでほしい。京都は学生のほかにも外国から訪れる人が大変多く、多彩な交流ができるコンパクトな街で、生きた歴史の中で過ごすことができるので、学問や研究を楽しむには非常に恵まれた場所です。大学では本当に自分の興味や関心のあることをエンジョイし、周りの多様な人たちとの交流を深めながら育っていくのが望ましい。京都大学で今まで味わったことのない喜びをできるだけたくさん経験してほしいと思っています」

CFプロジェクト　記者会見の様子